

舞

まちづくり
ネットワーキングえひめ

たうん

VOL.85
2005.7



アングル 愛媛を「メール道」「ブログ道」で元気に発信しよう！

久米繊維工業㈱代表取締役社長／久米 信行 …… 1

特集 『情報—地域のコミュニケーション力向上』

「ブログ」で発信！ —しまなみのあったかいぐらし— 今治市・上島町／池田 由美子 …… 2

「ボランティアホン」携帯メールでボランティア情報 松山市／本宮 敏 …… 4

「ITが紡ぐ市民の輪」—メールリングリストで地域を元気に— 松山市／本山 道男 …… 6

中山間地域へ広がる「高速無線LAN」 内子町／小野 尚久 …… 8

「新しい隣組」の実現を！

—活動を通じてコミュニティビジネスの芽が—

群馬県桐生市／塩崎 泰雄 …… 10

「ネットデイ」—協働による情報化の道普請—

兵庫県姫路市／和崎 宏 …… 12

論壇—まちづくり—

地域情報学—地域のコミュニケーション力向上—

高知大学／坂本 世津夫 …… 14

竹森まりえのWEB旅日記

キラリ光るまち

彩(いろどり)…情報化で地域ぐるみの事業を創出

徳島県上勝町／横石 知二 …… 18

若者とまちづくり

第五回「はがき」が結ぶ心のネットワーク

伊予市／若松 進一 …… 20

トークナウ イベントを通じて学んだもの

「まちづくりは愛するということ」から始まる

今治市／畑 紀輔 …… 22

松山市／山本 早千奈 …… 23

媛のかわら版

おイネさんドイツへ行く！(Vol.3)

松山市／戒田 節子 …… 24

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩キ目デス&足テラス

情報を生んだ小さき建物「古学堂」・大洲市阿蔵

伊予市／岡崎 直司 …… 26

媛のくにフラッシュ

information センターからのお知らせ …… 28

特集

「情報—地域のコミュニケーション力向上」

よく耳にするWEBとは、クモの巣の意味である。瀬戸大橋などの架橋により四国と本州が結ばれ、高速道路網の整備とともにどこへでも迅速にモノを運ぶことができるようになった。情報の世界でもインターネットやブロードバンドの普及により、いつでもどこでも「誰とでも」自由に話ができ、直接参加できるようになった。このことは血縁・地縁・職縁の従来の粹社会を越えてボランティア活動などそれぞれの好みの活動の縁で広がる「好縁社会」や、小さなものが結び支え合うネットワーク型社会の始まりともいえる。田舎は時間がゆったり流れるので、都会よりもはるかに息の長い取り組みが可能で、交流が盛んな地域ほど豊かさが期待される。情報を上手に活かしてグローバルに思考し、ローカルに暮らそう。

(編集子 清水)

表紙の言葉

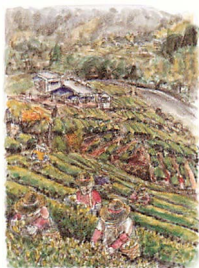
昨年まで新宮村と呼ばれ新宮茶を育てる茶畑は、重なる山なみにかこまれていきます。

霧の森と言われるとおり、当日は霧が山麓を覆う。新緑と茶畑にのこさない天氣に感謝。

脇茶園の指導の元に、地域一帯自然の生態を活かし、完全無農薬栽培とす「ごい事です」。

茶園に続く工場からは茶の香が心を和ませ、案内してくださった二代目さんの笑みが山にこだまする。

柳原あや子



愛媛を「メール道」「ブログ道」で 元気に発信しよう!

久米繊維工業株式会社

代表取締役 久米 信行



二〇〇五年は「ウェブブログ」を活用した新しいインターネット革命の元年になりそうです。これまで、インターネットの主役は大企業やITベンチャーでした。しかし、今度のブログ革命の主役は、個人・中小企業・NPOになるでしょう。それも個性に富んだ地方の個人や法人ほど有利だと思います。ですから、今こそ、愛媛の元気な人たちは「メール道」と「ブログ道」を極めて、どんどん情報発信していただきたいのです。

■ブログ道で、中小サイト3大悩み解決

ウェブブログの普及を私が革命と呼ぶのは理由があります。資金や技術力に乏しい個人や中小法人サイトが抱えてきた3つの大きな悩みを解決してくれるからです。

①情報デザインがバラバラの悩み

これまで、中小サイトのデザインはどうしても見劣りがしました。また、サイトごとにメニューの並び方や操作性にばらつきがあつてユーザーに不親切でした。

た。ページが増えるほど、どこにどんな情報があるのか見つけるのが難しくなり、地域等で横断検索を行うにも検索エンジンを使うしかありませんでした。しかし、愛媛の有志で、標準化されたブログ記事情報データベースを活用すれば、たとえば、各自が個別に発信していても、情報はすっきり整理・連携され、情報デザインの悩みはすべて解決されてまいります。

②毎日自前で更新できない悩み

リピーターや検索エンジンに評価を受ける情報発信のポイントは、毎日のように質の高い情報を発信し続けることです。しかし、これまではHTML言語やWEB制作ツールの操作法を独学で勉強するか、外注業者に頼むしか、更新の方法がありませんでした。しかし、ブログならば、ワープロとデジカメが使えるぐらいのスキルがあれば、誰でも毎日簡単に情報発信することができます。

③検索エンジンで上位表示されない悩み

ウェブブログは、テキスト中心で見出し

タグなどを活用するので、一般的に検索エンジン対策で有利です。しかも、毎日テーマに沿った新鮮な情報を出し続けて、ポリュームも増えれば、さらに上位表示されるはず。その上、地域の仲間でお互いに記事で紹介しあったり、リンクやトラフィックバックといった連携の仕組みを使えば、数限りないWEBサイトの中で埋もれてしまうこともないでしょう。

■メール道で、生涯のファン2縁者を育む

ブログをきっかけに、愛媛や皆さんのファンになつてくれた方には、ぜひ熱いメールを出しましょう。一対一のメールに勝るコミュニケーションはありません。一対多数のファン向けの情報はブログで発信し、一対一の大切なリピーター向けの情報は個別メールで出すように使い分けましょう。日々みなさんのメールに一喜一憂し、時に届くみなさんのメールに涙する人たちは、きっと生涯の縁者になつてくださることでしょう。



著書「メール道」(NTT出版)

「ブログ」で発信！ しまなみのあったかい暮らし



今治市・上島町

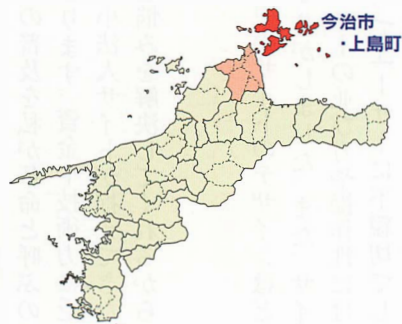
しまなみグリーンツーリズム

推進協議会事務局

池田 由美子

(県今治農政普及課しまなみ農業指導班)

<http://www17.ocn.ne.jp/~shimagt/>



しまなみグリーン・ツーリズム

昨年合併した今治市の島嶼部と越智郡上島町からなる「しまなみ地域」は、本州と四国をつなぐ西瀬戸自動車道（通称しまなみ海道）の開通により注目を浴び、周辺の瀬戸内の美しい島々と、豊かな自然からの恵である高品質な柑橘類や瀬戸内の海産物に恵まれた魅力ある地域である。

五年ほど前、県の事業が導入されたことをきっかけに、地区の生活研究グループが中心となり、アイデアを出しあつて、島々を訪れる人々に対し、農山漁村の暮らしを体験してもらおう三十二のメニューを選定し、パンフレットを作成した。「しまなみグリーン・ツーリズム」活動の始まりである。このグループの地道な活動が、地域の農山漁家に広がっていき、今では六十八の体験メニューが生まれ、修学旅行生など年間約七千人の体験者を受けている。



しまなみグリーン・ツーリズム推進協議会
ホームページ

しまなみの情報発信を

平成十七年度より、それまでの旧町村の関係各課長からなる行政主導の「しまなみグリーン・ツーリズム推進協議会」を体験実施者等からなるスタッフ制へ再編し、産直活動や農家民泊、地産地消やネット販売も含めた新たなグリーン・ツーリズムの推進方策を検討し、自主的活動ができる組織へと移行してきているところである。

このように、活動は着実に地域に根ざしてきてはいるが、修学旅行などの特別な場合を除き、近隣地域からの来訪者が中心で、まだまだPR不足であるということとは否めない。地理的条件から都市の住民が島の暮らしを身近に感じることができ、る機会は少ないと思われるので、しまなみの情報発信ができるホームページを作成し、全国に向けて活動のPR行うことにした。

ブログで島の暮らしを

リアルタイムで発信

本年四月に運営を開始した当協議会のホームページは、体験メニューや管内の産直市を中心に、しまなみ地域を紹介したものになっているが、このホームページを開設するにあたり、できるだけグリーン・ツーリズムの活動に携わっている人たちが参画してもらえようというシステム作りを考えた。「島々で過ごすローライフ」をイメージしながら、地域住民と都市の人々とのインターネットを通じて日々の生活の交流が簡単にできるシステム、それが「ブログ」を利用した「しまなみお陽様だより」のコーナーである。

しまなみ お陽様通信 (ブログ)



ふるさと味体験
(イギリス豆腐づくり)

農林漁業収穫体験
(地引き網)



「ブログ」とは、簡単に日記形式で記事を書き込むインターネットのサイトやホームページである。開設者が常時情報を公開している点や閲覧利用者が自由に意見を書き込める点がこれまでのホームページと異なっており、作成や管理が非常に簡単に行え、情報の相互交換も容易であることで注目をされている。

「しまなみお陽様だより」では、しまなみグリーン・ツーリズム活動に携わる人たちが、島の暮らしをリアルタイムで発信することになっている。スタートしたばかりではあるが、「グリーン・ツーリズム体験レポート」「しまなみ農業情報」「四季のしまなみ」「イベント情報」などのカテゴリーを設け、島の日常を感じる

ことができる情報を協議、会員の人たちから提供してもらうシステム作りを行った。

「ブログ」は鮮度が命である。頻度よく情報を更新できるように人材育成を行うことが求められている。そのため運営研修会を実施し、パソコンを保有する人を中心に、入力演習等を行い、少しずつではあるが、会員自らが情報を公開できるようになってきている。また、フアックスからの簡単な情報提供方法なども提示し、できるだけ多くの人が関われる場となるよう工夫している。

これからの展開

今後は、更に効率的な運営とより多くの人が参加できるよう研修等に加えて、情報機器の整備や地域の情報発信の拠点作り等を行う予定である。これまでにない賑わいのある地域おこしのサイトとなるよう協議会をあげて取り組んでいきたい。

「しまなみお陽様通信」が、多くの人の交流の場となり、インターネット上のしまなみのあたかきを感じるバーチャル体験が、実際に島へと足を運んでもらうリアル体験へと発展していけば、経済的にも効果が生まれ、地域全体の活性化につながる活動となることと信じている。

「ボランティアフォン」 携帯メールでボランティア情報

—あなたのやる気応援します！—



松山市

松山市社会福祉協議会
地域福祉課
(松山市ボランティアセンター)

本宮 敏

<http://www.matsuyama-wel.jp/vc/>



ボランティアの思いをカタチに

この度、「情報」というテーマをいただき、いくつかある事業の中から「おせつたい通信」(情報紙毎月発行)と「ボランティアフォン」(携帯電話ボランティア情報システム)についてご紹介させていただきます。

まず、私が所属する松山市ボランティアセンターは、松山市社会福祉協議会の地域福祉課職員五名が業務を担当しています。

その主な業務内容として、

- ①センター運営
- ②需給調整
- ③情報収集・情報発信
- ④ボランティアの育成

の四つを柱に事業を進めています。

阪神淡路大震災等をきっかけに「ボランティア」という言葉が一般化してくるにつれ、「何かしてみたい」というボランティア希望者が増加してきました。しかし、希望はされてもその「何か」が明確になっていないこともありますので、ご本人の「思い」が「カタチ」となるよう当センターのスタッフがコーディネートを行なっています。前述の四本柱のうち、③情報収集・情報発信については、従来から「おせつたい通信」を活用してきまし

た。「おせつたい通信」は各施設・団体等からのボランティア情報・イベント情報・ボランティアに対する助成金情報等を掲載し、毎月一日付けで約三千部発行しています。

従来の方法では限界が：

ボランティアセンターには、毎日のようにボランティア募集の依頼があります。毎月二十日の原稿締め切りに間に合う依頼は、「おせつたい通信」に掲載して募集を行います。原稿締め切りに間に合わない依頼や災害など急なボランティア募集等については、職員が手分けをして登録ボランティアに電話で連絡をしているのですが、昼間は繋がらないことが多く、留守番電話に用件を吹き込んでも返



「ボランティアフォン」で情報発信及び情報確認中！

事があるのは数日後、もしくは連絡がないことが多々あります。たとえ繋がったとしても、「いついつこんなボランティアがありますか参加できませんか」の問いに、即答されるのは難しいようです。また、登録の際にお会いしただけで面識がない場合も多く、通常のコミュニケーションがない中で突然ボランティアを依頼しても、「何のことですか？」と返される等受け入れて頂くのは困難なものです。また、家族の方が電話を取られた場合は、不審な誘いと誤解されることもあります。そんな状態の中で、ボランティアの学生さんが携帯電話のメールを喜びに、しかも送受信を瞬時に行っている姿を見て「ボランティアのコーディネートにも使えるかもしれない」と思いつきました。「ボランティアフォン」を計画してから幾度となくテストを重ね一年を経て昨年六月に開始しました。登録は簡単にできます。登録時のみボランティアセンターにお越しいただき、登録用紙に住所・氏名・携帯メールアドレス等を記入し、実際にメールが届くか確認テストを行い登録完了となります。その後、ボランティア情報が届けば、内容確認を行い興味があれば「参加する」をクリックすれば、ボランティアセンターに誰が参加するという情報が一覧で解るシステム

となっています。また、質問等があれば、「質問・問い合わせ」をクリックし内容を記入後、送信いただければ、その内容についてメールでお答えしております。

期待が高まる ボランティアフォンの活用

若い世代から高齢者まで携帯電話が普及する中、ボランティアの参加を呼びかける手段としては最適だと思



ボランティアフォンで届いたメールを確認。“参加してみよう！”

ますし、増大するボランティア登録者への連絡方法として少ない職員で対応できる簡便な方法であると考えています。今では、以前の電話連絡の困難さから開放され、このシステムを順調に運用し、迅速な対応に努めています。もちろん、その他の媒体も廃止したわけではなく、従来からある紙媒体の「おせつたい通信」と新システムである電子媒体の「ボランティアフォン」を併用することで、より迅速かつ確実に情報が発信できています。現在の登録者数は約三百名、実際に登録

しボランティアに参加した方からは、「タイムリーな情報が届く」、「見たいときに見られる」、「友達同士で相談ができる」、「気軽に参加できる」等の声が寄せられています。また、このシステムを応用すれば「各種会議や催し物の案内」、「災害時の緊急連絡」や「安否確認」などにも導入できるのではないかとますます期待が高まっています。

今後、より多くの方にボランティアに興味をもってもらいたいとき、気軽にボランティアに参加いただけるよう努力して参りたいと考えていますので、是非一度、松山市ボランティアセンターに足を運んでいただきたいと思います。



“ふれあいの祭典”ボランティアの皆さんです。「ボランティアフォン」で連絡調整を行いました。

ITが紡ぐ市民の輪

—メールリングリストで地域を元気に—



松山市

愛媛県ジゲおこし
インターネット協議会
(愛媛ZIT)

事務局長 **本山道男**



毎日届くメール

メールリングリスト(以下、ML)をご存じでしょうか。MLにメールを送信すれば、登録された会員すべてに、同じメールが配信されるシステムのことです。ホームページやブログと違い、アクセスせずともメールを読むことができるので、忙しい人や横着者に合った媒体なのかもしれません。そして、私たち愛媛ZITは、MLの意見交換を中心に地域起こしを目指している市民の集まりです。

今日も私のパソコンに、愛媛ZITからメールが配信されてきました。

「日本環境会議が松山大学で開催されます。みなさんご参加ください」「内子で無線LANの実験がうまくいきましたよ。ブロードバンドの地域格差解消に大きな力になると確信しました」

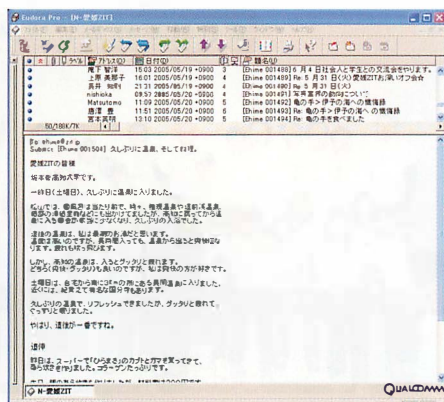
一通目は会議の準備をしている松山大学の学生スタッフから、「二通目は「urban Japan 構想」を進める総務省幹部からのものです。街を歩きながら考えたこと、主催しているイベントへのお誘い、就職活動で悩む大学生のつぶやき……。テーマは実に様々ですが、どのメールも愛媛はこれでもいいのか、愛媛を変えていこうという思いが、投稿されるメールの根底に流れています。

愛媛ZITの誕生

愛媛ZITは、朝日新聞の砂場隆浩記者が昨年九月、鳥取総局から松山総局に転勤したことから始まりました。砂場記者は、鳥取で、MLで地域の課題を議論している鳥取県ジゲおこしインターネット協議会(ZIT)の中心メンバー。百人を超える会員が集まったZITの送別会で、愛媛でもMLを立ち上げ、愛媛と鳥取で地域連携をしようとZITと同じサバーに新しいMLが設定されました。これが愛媛ZITの誕生です。

会員は多士済々

初回登録者は砂場記者のほか、愛媛で地域情報学を担当していた坂本世津夫



毎日続々と届くメール

助教(現・高知大学教授)、梅錦山川の山川浩一郎社長、それにZITの小谷寛会長の四人でしたが、五月末現在の会員は八十八人を数えます。大学生からベンチャー起業家、官僚、会社員、年金生活者、主婦と実に様々な顔が集っています。

投稿されるメールには、誹謗中傷を除けば基本的に制限はありません。地域を考える提言だけでなく、日常生活の不平や不満だってかまいません。暮らしの中のつぶやきにこそ真実があるからです。市民運動だけでなく、企業のPRなどもOK。愛媛を元気にしたい、頑張っている人をみんな応援したいというのが、愛媛ZITの願いだからです。

オフ会が多いのも愛媛ZITの特徴でしょう。オフ会とは「オフラインミーティング」のこと。つまり飲み会。何かと理由を見つけては毎月開催しています。顔と顔を合わせ、杯を重ねれば自然と信頼が生まれます。反対に、初めてオフ会でも会っても、すぐ旧知の間柄のように親しくなれるのも、メールが縁を紡いでくれるお陰だと思っています。

鳥取のZIT

愛媛ZITの母体となったZITについても少しお話ししましょう。一九九七年に境港市であった「山陰・夢みなと博覧

会」の県民応援団に集った市民たちは、市民参加型のユニークなホームページを立ち上げ、博覧会場でオフ会も開きました。そして博覧会の閉幕後も、こうしてできた市民のネットワークを残そうと一九九八年三月、設立されたそうです。「ジゲ」とは鳥取で「地元」を意味する方言。「ジゲおこしをインターネット」という理念をそのまま団体名にしました。この理念は愛媛ZITの理念でもあり、ZITへの敬意も込め、私たちは愛媛ZITと名乗ることにしました。



ZITの登録会員は八百人を超え、副知事以下鳥取県職員が割と多く、鳥取商工会議所会頭ら経済人、大学の教員、学生、県外や国外の人も含めて、愛媛ZIT



楽しい愛媛ZITのオフ会

以上に多士済々です。

国内最大級の弥生遺跡である「妻木晩田遺跡」の保存も、ZITの上での議論の盛り上がり、県を動かす原動力になったそうです。

ZITのもうひとつの特徴は障害者の積極的な参加です。「すべての人に笑顔がなければZITじゃない」を合言葉に障害者インターネット講習会を年二回開催、鳥取県も委託事業として運営費を助成しています。電動車いすを神輿のようにみんなが担いで階段を上がるのもZITのオフ会ならではの光景です。パソコンが故障した障害者が「パソコンが修理中だった一週間は、社会と隔絶されたような気分でした」と投稿されたことも聞きました。私たち愛媛ZITも、この姿勢は見習いたいと思っています。



鳥取ZITのWeb
<http://www.tottori.net/>

中山間地域へ広がる「高速無線 LAN」

—やまあいを情報の発信基地に！—



内子町

NPO 法人「凧ネット」
会長 小野 尚 久

<http://www.ikazaki.ne.jp/>



NPO 法人凧ネット誕生

NPO 法人凧ネットは平成十五年、五十崎町（現内子町）に生まれました。凧ネットの主役は、五十崎町の商工業者の中でも特にパソコン好きのオヤジたちです。「五十崎町から世界に情報を発信するんじゃー」と任意団体五十崎凧ネットワークを結成したのが平成八年でした。法人格を取得した現在も結成当時の熱い想いが活動の基本であり、「自分たちのパソコンやITの知識を生かし、社会のために何か貢献できないか？」をテーマに様々な事業活動を展開しています。今回、重松地区での実験のきっかけとなったのは、「町の中心では高速回線が使えるが、町内の多くの地域は十年前と変わらない。」「このままでは五十崎町は情報化の流れに残された離れ小島になってしまう。」との思いでした。産官学民が一体となって重松地区での実証実験について話し合いが始まったのは設立直後の平成十五年十一月のことでした。

「無線LAN」とは いったい何でしょう？

「無線LAN（LAN＝ローカル・エリア・ネットワーク）」、さてこの意味をど

のように説明をすれば良いのか、私たちは「いかざき凧ネットワーク」を立ち上げてから今日まで、パソコンを使った様々な試みを行ってきましたが、分かりやすく説明する事が非常に難しくても今も苦慮しています。

では私達が日常使っている携帯電話を思っして下さい。形態は違いますが無線LANそのものと言えます。

名前の通り電線等を繋がないで電話が出来ます。またテレビのような動画やデジカメで撮った写真を送る事も出来ます。このような無線経路の仕組みが「無線LAN」です。

高速な「無線LAN」は一般の電話回線に比べて約五百倍、機器や環境によつてはそれ以上の情報を運ぶ事が出来ます。



旧五十崎町重松地域

「高速無線LAN」を使った 地域情報化の取り組み

現在の情報網（主にインターネット）活用において、殆どの町の周辺部はその働きが十分に行えないのが現状であり、今か今かと待っているのが現状です。行政の電子情報化が進むにつれて、そのサービスは全ての住民が同じように受けられる事が重要であると思います。それを解消しようという思いを持った人々が集まり、今回「旧五十崎町重松地域」での実験に発展し、現在も継続中です。

しかし、この実験、なぜ「高速無線LAN」なのかと言いますと、現在は住宅集合地域（町の中心部）では通信業者においても採算に合う様ですが、まばらな周辺地域では経費が多額になり採算に合わなくなるという事であり、線路の広がりが遅れているのが実状のようです。

この試みは現在「条件不利地域を解消」と言う事で多くの実験が各地域で行われています。そこで、安く出来る方法の一つが「高速無線LAN」を使う事でした。

地域への関わりと広がり

「中山間地域へ広がる高速無線LAN」なのですが、例えば「農産物が売れますよ」「地域の宣伝が出来ますよ」「孫とテレ

ビ電話が出来ますよ」とたくさん申し上げたところで、「方法が難しくて・お金がかかるし・利益も出ないし」と言った事でまだまだ必要と感じる人は少ないようです。



ケーブル敷設作業



作業ミーティング



反響！

専門家からは驚きの声か

「産官学十民」が関わった五十崎町の実験ではNPO団体と地元住民が知恵を出し合い、安い予算で高速なインターネット環境を手に入れる事が出来ました。

その事は実験と言うより実践に近いもので、「高速無線LAN」によるネットワークを運用する事はそれ自体が大変難しいものでした。

地域住民が参加すると言う大変難しい問題をクリアした事も評価されたのか、専門誌でも取り上げられています。しかし結果を実感する事は個人差が大き過ぎて、一般に理解して頂くのに大変時間がかかっております。

これからの展開

今後は、使う人すべての人が操作を意識しないで使える事、逆に意識しながら道具として活用出来る事、それらを考えながら実験を続けて行こうとしています。

最近では高速な情報通信線が拡張されるとか、「高速無線LAN」を使って周辺地域と結びとか、どんどん拡大されて行く記事が毎日の様に紙面に登場しています。

このように、今後も情報通信線は必要不可欠となりつつあり、この「高速無線LAN」は二次的に大変重要な線路になると思っております。そう言う意識のもとで、現在も色々な実験や活動を続けております。

「新しい隣組」の実現を！

ー活動を通してコミュニティ・ビジネスの芽がー



群馬県桐生市

NPO法人
桐生地域情報ネットワーク
理事長 塩崎 泰雄

<http://www.npokiryu.jp/>



NPO法人桐生地域情報ネットワークの理念

桐生市は『織物の都』として栄え、明治より昭和中期まで日本の繁栄の基礎を築いてきたが、バブル崩壊以後、繊維産業の地盤沈下、旧市街地の衰退など、地方都市が抱える問題が山積している。現在の人口は十一万三千人で高齢者率は二十四%を超えた。

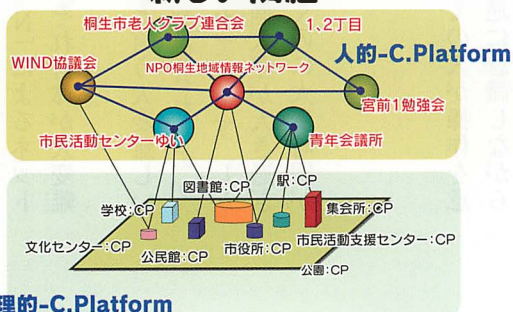
そのような地域で、NPO法人桐生地域情報ネットワークは、『情報化を通して、ひとづくり・まちづくり・お手伝い』をスローガンに活動している。パソコン通信時代からの二十年の実践と研究の中から情報化技術と、地域に住む方々のネットワークを融合させた『新しい隣組』の理念を提唱。これを実現するためのヒューマン・ネットワーク（人材のネットワーク）を「コミュニティ・プラットフォーム」、そこに蓄積・活用される財産を「コミュニティ・アーカイブス」と定義し、すべての活動はその両立を目指している。また、『まちづくり』とは地域に住まわれる方々の「ヒューマン・ネットワーク」の生成・更新・消滅の連続であり、情報化技術と「ヒューマン・ネットワーク」は融合するだけでなく、必要に応じて連携し、それによって出来る自律分散協調

型のネットワークこそが「新しい隣組（コミュニティ・プラットフォーム）」であると考えている。その連携による協働作業によって作られた「コミュニティ・アーカイブス」は、残すだけではなく、実際に活用されることが大切であり、その手段についても当NPOが提言・実践している。

主な活動について

活動の内容は、「情報化」に関する提言、実践、サポートという流れと（左図A→C）、地域固有の文化を残して行く「アーカイブ」事業（左図O→4）、さらにはインキュベーション事業やビジネスの種（左図a）、の三つに大別できる。情報化事業はP2P、コンソーシアム、アーカイブ事業は「新あすへの遺産」を中心に、それら二つの事業がどう発展し、ビジネスの芽が誕生したかについて述べてい。

【自律分散協調Network】 “新しい隣組”



●新あすへの遺産

高齡者が中心となり「織都・桐生」の繁栄を支えた彼らが、自らの体験を語り執筆し、桐生の歴史と文化を、後世に伝えるコンテンツ作りを目指した。二年間は書籍の刊行、三年目は職人自らが語りだすというストーリー。

・「桐生織物と撚糸用水車の記憶」

<http://www.nbookiryu.jp/asuenoisan/>

・「桐生お召しと職人の系譜」

<http://www.nokiryu.jp/asuenoisanz/>

「桐生織物を伝え残す連続講演」

<http://www.npokinryu.jp/asuenoisans3/>

[index.html](#)

●八丁撚糸機保存会

<http://www.nookiryu.jp/8cho/open>.

html

桐生八丁燃糸機は、お召しの基礎技術として、桐生織物発展の原動力であつた。最盛期には五百台とも言われる多くの八丁燃糸機が稼動したが、昭和四十年代、繊維産業の衰退とともにその姿を消した。当保存会では、桐生お召し、水車、八丁燃糸機などのアーカイブ事業の編纂を行う中、伝統産業として貴重な機械である燃糸機の記録と保全だけでなく、新しい伝統産業への礎となるべく活動している。サンプルの絹糸も燃り上がり、製品としてのクオリティをあげてゆく段階に

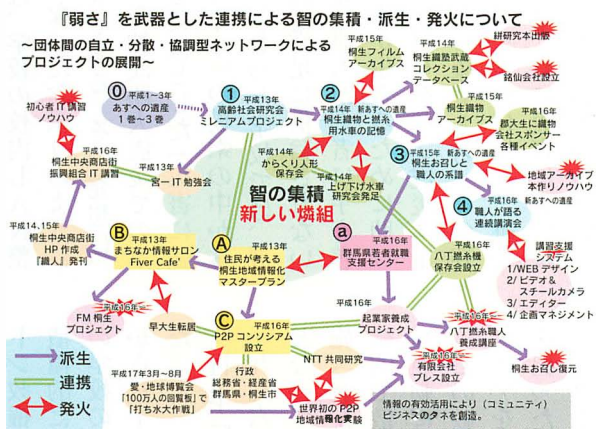
入った。

●P2Pコンシウムと百万人の回覧板

<http://www.o2o-conso.jp/index.html>

本コンソシアムは、次世代のネットワーク技術であるP2P（プロカレス）システムの活用を通じて、人と人を繋ぐ真のネットワーク技術の醸成を目的にNPO内に設置した。目指すネットワークはプロカレス型ネットワークで、管理者であるサーバーと情報サービスを受けるクライアントからなる既存のサーバー&クライアントシステムに対して、管理者や強力なサーバーを必要としない為、大幅なコストダウンが可能となる。

さらにブローカー型ネットワークは、地域活動・広告ビジネス・ゲーム・行政サービスなど幅広い分野で期待され、既存のネットワークのシステムを補完する役目を果たすシステムとして注目を集めている。コンソーシアムの活動として



て、「愛・地球博」にP2Pシステムを用いた「百万人の回覧板」を提供し、「百万人の打ち水大作戦」を実施する。「本日正午、打ち水決定」とメッセージが流れると、各地域においては、回覧板で、参加したい、○○求む、○○あげる、などのメッセージが流れる。百万人にメッセージを送信する時間は、理論的にはわずか三十秒である。

まちづくり活動において、情報化技術とコンテンツ作りは車の両輪のような関係であり、そのどちらかが掛けてしまつては意味をなさない。情報化は手段であるが、情報化によつて進められるアーカ

イブ事業もまた手段であり、それらの活動を通して作られる「新しい隣組」の実現が最終的な目標である。さらには、このような展開の中で、派生、発火した事業は、地域内で必要とされて生まれたものであり、いくつもの活動を通して、それらがまさにコミュニティ・ビジネスの芽となることがわかった。地域の発展、活性化に経済活動は不可欠であり、当NPOはその実現に向けた活動を目指している。

「ネットデイ」

—協働による地域情報化の道普請—



兵庫県姫路市

NPO 法人はりまスマート
スクールプロジェクト
理事長 和崎 宏

<http://www.ssj.gr.jp/hssp/>



「ネットデイ」は、学校の校内LAN整備を、地域一体となったお祭りのようにして行うイベントである。その発想は、一九九五年一月の阪神淡路大震災でのボランティア活動を契機とした「災害に強いコミュニティづくり」の模索の中から生まれた。避難所となった学校では、被災後しばらくの間、満足に供給されない食べ物を分け合い、誰もが弱者に手を差しのべて、住民同士が生きるために助け合い、支え合う姿が見られた。「震災ユー・トピア」と呼ばれる現象である。この姿を、災害時ではなく平常時に持続・継続的に再現することで、真に災害に強いコミュニティを創造できないものかという思いが、学校を舞台としたネットデイというプログラムの構築へとつながったのである。

米国生まれのネットデイを 地域づくりのプログラムに

一九九六年三月、折しも米国シリコンバレーでネットデイが始まった。情報化による地域活性化と教育関係のふたつのNPOが連携して、ハイテク企業を中心とした地域経済を巻き込み、「すべての学校の全部の教室を高速ネットワークに接続する」ことを目標とするボランティア活動を立ち上げた。その後は、クリン

トン政権がナショナルネットデイとして積極的に運動の旗を振り、三年間で全米の学校のインターネット接続率を十二%から八十九%に向上させることに貢献した。

日本でも米国の実施例に倣い、一九九六年から先進的な教師たちが中心となって、複数の地域でネットデイが実施された。しかし、その活動は、自己完結的で散発的な配線工事に終わり、大きな運動に育つことはなかった。

この転機となったのが、震災ボランティアを経験した住民たちが活動の中心を担った「はりまスマートスクールプロジェクト（以下、HSSP）」のネットデイであった。配線工事を直接の目的とせず、情報拠点としての機能や、学校を地域の核として支援する住民の仕組みを、ネットデイをきっかけとして構築することを目指していた。

HSSPは、教育関係者だけでなく、自治会や婦人会・PTA等、地域の既存組織を活用して、より多くの立場の地域住民を参画させた。また、ホームページ（以下、HP）やメーリングリスト（以下、ML）という、本来バーチャルでグローバルな情報通信技術（以下、ICT）を、地域社会の中に効果的に組み込むことに成功した。HSSPのネットデイは、そ

の後、沖縄、千葉、長野、和歌山、鳥取、神奈川など、日本各地で実施される活動のモデルとなり、「日本型ネットデイ」と呼ばれ、兵庫県と同様の効果を他の地域に与えている。

ネットデイは地域の縁日

日本型ネットデイには、従来の学校における活動とはまったく異なる特徴がみられる。①できるだけ組織的な動員をせず、参加者の自発を促す努力をする、②参加者に多様な活躍の場をつくり、役割分担を行わずに個人が自主的に仕事を選択する、③誰もが積極的に役割を担い連携する作業を企画する、④教師が生徒に指導するのではなく、大人と子どもが共に学び合える場を作る、などである。

効率や能率を追い求めていたこれまでの仕組みと違い、プロセスの大切さを重視したこのような試みは、従来の学校と地域の関係とは異なる感覚を、参加する人々にもたらした。この仕組みが、旧来、地域住民が互いに協力し支え合って成立させていた「縁日」のにぎわいを彷彿とさせる「場」が学校に再現し、地域全体で盛り上がる原動力となった。

こうしてネットデイは、参加者に互いに相手を理解して、不足する部分を積極的に補い合い、共に協力して地域に貢献

しようという意識を覚醒させた。相互に支え合う喜びを体感させることにより、震災ユートピアを再現することに成功し、地域を再ネットワーク化するきっかけとなっている。



ケーブル成端作業

テレビ会議の準備をする児童



開通式後の集合写真



天井裏配線工事



廊下の配線工事



日本型ネットデイから 日本版ナショナルネットデイへ

二〇〇五年二月二十四日、政府のIT戦略本部は、重点政策「IT政策パッケージ—2005」を決定した。この中にIT化の遅れている分野等の柱として「ネットデイ展開の支援」が明示された。

ボランティアによる草の根運動として育ってきた日本型ネットデイが政府プロジェクトとなることへの実践者たちの不安は大きい。しかし、ネットデイが国家事業になることによる社会への効果は計り知れない。決して、「お安い配線工事」ではなく、学校と地域をつなぐ絆として、全国展開できる官民協働の仕組みを構築し、支え合う地域社会の実現に貢献していきたい。



高知大学生涯学習センター
教授 坂本 世津夫

はじめに

地域の活性化、地域づくりでは、まず地域内でのコミュニケーション力(対話力)を高めることが重要である。コミュニケーション力は、見る力、聞く力、考える力(構想力)を養うことでレベルアップさせることができる。

地域情報学とは

愛媛大学地域情報学(伊予銀行寄附講座)は、情報化社会のありかたを「地域」

愛媛ZーTの立ち上げ

という視点で捉えなおし、地域が自立する為にインターネットなどの情報通信技術（ＩＣＴ）を如何に活用すれば良いのかを研究するものであった。

初年度は、入門編として「地域に根ざした情報化の可能性」をテーマに、主に情報技術・ネットワークに焦点を絞った研究（月例研究会）や講義（地域開放講座）を行い、同時に先進地域の調査も行った。

次年度は、応用編として「地域の情報化と魅力ある地域の形成」をテーマに、農業や商業、コミュニティなど具体的な取り組みに焦点を絞った研究を行った。これらの内容は、愛媛大学のホームページで公開されているので是非ご覧いただきたい。

最終年度は、「地域での知的能力とコミュニケーション能力を如何に高めて、自律的な地域を形成するか」をテーマに、五回の月例研究会を行った。研究会では、参加者が一体となつて議論を繰り返して、その結果、愛媛ZーT（愛媛県ジゲおこしインターネット協議会）という組織が誕生することとなつた。ジゲおこしとは、地域おこしの意味である。私としては、愛媛に可愛い子供が産まれたように感慨無量である。

コミュニケーションとは

愛媛での三年間を通じ、本当に伝えたかったのは「コミュニケーション力」である。本来コミュニケーションとは、双方の「意味や感情をやりとりする行為」（『コミュニケーション力』齋藤孝著・岩波新書）である。単に、一方の情報伝達ではない。しかし、日本の状況を見ると、まだまだ一方だけの情報発信しか見えてこない。これからは「ブログ」などのように、ICTを活用してクリエイティブな関係性をつくることが重要である。

一般にICTを活用したコミュニケーションでは感情(心)を伝えることが難しいと言われる。しかし、私はそうは思わない。文字列と文字列の間に感情を読みとることができるし、画像や音声など、色々なメディアが使える現在では、新たな表現力も可能である。

オンライ

ンでコミ
ニケーシ
ンを進め
上でも、
はり文脈
理解し、
互の立場

地域情報学

Study of Regional Information

地域情報学とは？

地域学 情報学

地理学 地域経済学 地域社会学

社会学

文化学

政治学

経済学 法学

国史館の資料を、FBIで
検索している様子。

国史館の資料を、FBIで
検索している様子。

国史館の資料を、FBIで
検索している様子。

● WHY 地域学

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域学 国史館資料をFBIで検索している様子。

地域情報学

<http://www.sri.ehime-u.ac.jp/>

地域情報学月例研究会



理解して、的確な言葉を使い、自分の意志（意味）を正確に伝えることができれば、議論は発展しない。議論を発展させる為には、コミュニケーション力を如何にレベルアップさせるかが重要となる。

オンライン（メーリングリスト）やオフライン（交流会）などで議論して感じたことは、松山は元来コミュニケーション力を有した地域である。もともと俳句が盛んな地域で、正岡子規や夏目漱石など文学的な土壌のある地域である。それが理由かもしれないが、各自の意見は端的にまとめられて発言されるし、言葉の選び方、相手を理解する力も素晴らしい。愛媛は、十分にコミュニケーション力を有した地域であると感じる。

聞く耳をもつ（見る目をもつ）

堅い話で恐縮だが、コミュニケーション力を高める上で重要だと考えていることを書かせていただきたい。

マルクス・アウレリウスの『自省録』（神谷美恵子訳・岩波文庫）という本の中に、次のようなことが書かれている。「会話に際しては人のいうことに注意していなくてはならない。またあらゆる行動に際しては、その結果生じてくることに注意してはならない。後者においてはそれがどんな目的に関連しているかを最初から見抜くこと、前者においては、その意味がなんであるかと注意すること」。このように、会話の中の真の意味を読み解く能力がコミュニケーション力の基本である。要は、じっくりと意味を考えることである。電子メールやメーリングリストでの会話など、利便性はあっても、便利の中にもじっくりと時間をかけて考える、相手の心を読み解く（理解する）作業が重要ではないかと考えている。

また、ピカソのキュービズムに影響を与えた画家セザンヌは次のように言っている。「見ることは、考えることである。考えることは、構想することである（構築）」。物事を、ただ単純に眺めるのでは

なく、色々と吟味しながら考えてみる。

想いをめぐらしてみる。自然の風景や

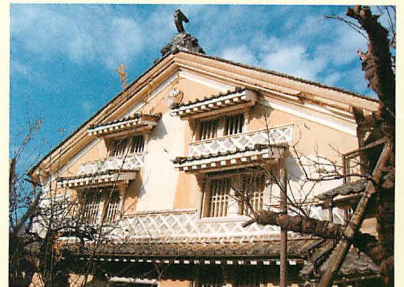
町並みを見るのもそうである。そうした

中で、自分自身の考えを作りあげていく。見て（聞いて）、考え（構想し）て、自分の中の考えを作りあげる。この過程があつてこそ、

真の見る目を養うことができるのである。「見て、考えて、構築する」、この循環は個人の能力を高めるには非常に重要な作業である。この能力を、個人だけではなく地域レベルで高めていくことができれば、地域は輝きだし、自ら動きだす（自立する）と私は考えている。

最後に

いま地域に求められているのは、地域での対話力・コミュニケーション力を如何に高めるかである。如何にして「知」のネットワークを形成していくかが求められているのである。大学など、教育機関が果たす役割も非常に大きいと考えている。



地域の素朴な 情報は、宝物

情報発信って、特別なことばかりを発信する必要はありません。日常の中にも、輝く宝石のようなものが詰まっているのではないかな？

…そう感じる全国の旅。さまざまな私感などお届けします。



竹森まりえの WEB旅日記

全国の農家WEB制作の旅



地域のリズムとニオイ

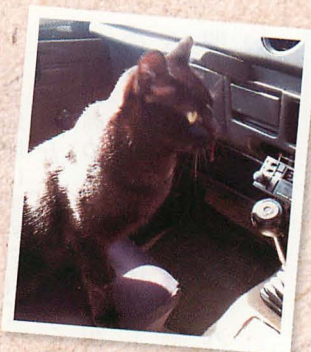
ホームページ制作のために、じつくりと農業の中身をヒアリングしたり、撮影を行うために、だいたい四日〜一週間ほど、ご依頼主の農業者さんのお宅にホームステイさせていただいております。この仕事を始めた当初、感じたのは、その土地、そのご家庭に「リズム」があるなあということ。

「リズム」をもっとも感じさせてくれるもののひとつが、「方言」です。

たとえば、北海道は比較的ゆったりと話す方に多くお目にかかりました。「めんこい、めんこい」は、ステイさせていただいた稲作農家さんのところにいる猫を抱っこして、お母さんが言った言葉。いやあ、本当にかわいいなあ、この猫と思いましたよ！「したつけ（じゃあね）」「おぼんです（こんばんは）」など、何だかほんのり温かく、ゆったりした方言が多くて、一週間もステイさせていただいていると、私のしゃべり口調も非常にのんびり変わっているのに気づきます。

一方、宮崎県と鹿児島県境の、花生産農家の方のお宅にお邪魔させていただくと、年配者の方同士でしゃべっている言葉は「ムムム、私にはまるで理解できないのであります。「うちんげんハウス」は、「うち

のハウス」という、ちよつとした単語は、慣れてくるとわかるのですが、早口でお話されている中身は私にとってはまるで外国語のようでした。でも、じーっと聞いているとある一定のリズムに聞こえてきて、楽しくなってきました。



我が家の猫は車のドアを開けると、ささっと助手席に乗って、200mほどの距離ですが、ドライブのお供をします…猫好きの方には楽しい情報のようです。

これらの方言が、ホームページでもうまく表現できたらいいなあと思います。多くの人は、ペンを握ると（パソコンの場合ですら）、キーボードと画面に向かうと…ですね、標準語で文章を書くことが多いです。これは、思考を整理し、論理的な表現をしようという意思が働くのだと思います。もちろん、TPOにあわせて、みなさんが理解する言葉で表現することは必要だと思いますが、地域性や個性を出す方法のひとつとして、方言での表現も盛り込んでみてはいかがでしょうか。

テキスト（文章）で表現するだけでなく、ブロードバンドの普及により、「ビデオレター」など、声と映像のメッセージも伝えることができるようになっていきますよ。



菊間町で、よくご家庭の食卓に上るという「じゃこめし」をご馳走になりました。郷土料理のページって、結構このHPでも人気のようです。



ある「生産者と消費者との交流会」に参加させていただいたとき、提供していただいた夕食。オーガニック素材で作られたその夕食には、手書きの献立紹介がつけられていました。消費者の方が作ってくれたそうです。生産者の方と消費者の方のお互いの信頼関係が、伝わってきました。

個性の表現こそ最大の差別化

さて、「二オイ」。そのご家庭の料理から、私はそれを感じます。野菜やお米の農家でしたら、食卓にご自分が作っておられる作物が料理となつて並びます。この人が作っているから安心して食べることが出来る…なんせ、会話を交わしながら、お互いの情報交換をしながらコミュニケーションを図っている、その相手の方が作っているんですから。「食の安全・安心」といわれていますが、それって、しっかりとコミュニケーションがあつてこそ生まれるんじゃないかなと思います。料理（の味付けや献立）からくる「二オイ」は、作り手そのものの「二オイ」であり、その人の個性なんだろうなあとと思います。情報発信は、決して飾ることなく、その人の個性

便利な道具を上手に使う！

をありのまま伝えることができれば、きっとファンはついてくれると思います。



ある地域の沼の近くで、こんなおもしろいオブジェ？を見つけました。これを面白いと思うかどうかは…個性？

個性を発信するために、日記を公開している農家の方も多いです。でも、やっぱり農作業合間の更新作業ってかなり大変だし、「つけなくては」と思っていると、そのうち日記に追われるように感じてくる人もいます（実は私もそうでした）。気楽に書いていくために、ブログ日記などいい道具ですよ。携帯電話からも投稿ができるので、育っている作物を畑から写真にとつて投稿。また、グループや、農業法人でいくつかの部門に分かれているところも、それぞれの部門別に、最近のようすを投稿…なんていうところも増えてきました。作物の生長のようす、どのような管理作業をしているかを、順を追って発信していくことができるので、生産履歴公開にもなります。これから情報発信を始める…なんていう方は、まずブログから始め

プロフィール

竹森まりえ

農家WEBサイト企画制作

1968年愛媛県久万高原町生まれ。外食産業、流通小売業界でのフリーライター（大阪）を経て、2001年9月から、農家WEBサイトの企画制作活動を開始。依頼農家に滞在し、農作業を手伝いながらサイト制作。消費者と農家が直接つながる道の一つとして、WEB活用を提案。

<http://www.takemori-garden.com/marie/index.html>



農村では毎年春になると、山菜とりに出かける農家の方も多そうですね。そんな日常を発信するのもGOOD！

めるのもいいかもしれませんね。
さて、この原稿を書いている私は、現在北海道の旭川市にいます。今年の北海道は遅くまでかなり寒くて、田植えが一週間ほど遅れているそうです。集中して作業をすすめるため、みなさん朝五時ごろから作業されています。山にはまだ雪が残っています。これも「情報」。日本は広い。情報はいたとこに、本当にたくさんあるのです。

徳島県勝浦郡上勝町

いろどり

彩：情報化で

地域ぐるみの事業を創出



株式会社いろどり

代表取締役副社長 横石 知二

勝浦郡
上勝町いろどり Web
<http://www.irodori.co.jp/>

四国で一番小さな町

上勝町は、徳島県庁から南西方向に四十岐の位置にあります。地形的には四国山脈の南東山地、標高千四百三十九メートルの高丸山を最高峰とする山脈が重なり、東流する勝浦川は、深い溪谷をなし、その流域に極わずかな平地が見られるほか、大部分が山地で山腹斜面には階段状の田畑があり、標高は百メートルから七百メートルの間に大小五十五の集落が点在しています。町の人口は、現在約二千六百十三人。高齢化比率が四割を越える四国で一番小さな町です。

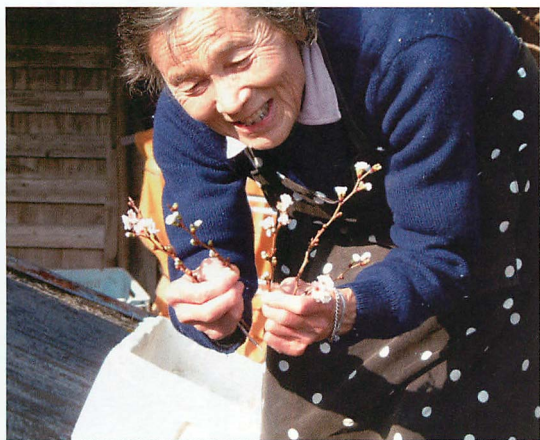
彩事業のきっかけ

昭和六十一年の秋にたまたま出かけた大阪の出張先の居酒屋（がんど）での出来事が町の運命を変えることとなりました。仕事仲間三人で食事をしていて隣に座った若い女性三人組が、食事に飾られている山の葉っぱをみて「グラスに浮かべてみよう」「持つて帰って押し花にしよう」と感動しているのを目の当たりしたとき、自分の考えているものは「これだ！」と直感的にひらめきました。それをやってみようと決心しました。まさに今から思えば、偶然立ち寄った居酒屋

彩の仕組み構築

で生まれたビジネスだったのです。町の半数が高齢者、あまり前に出てこない女性達、そんな状況の中にあつて、軽い、美しい、お金になる産業としてキャッチフレーズを掲げて推進。その人気は急速に高まっていききました。現在では百七十七名が参加する町の一大事業に成長しております。

当初は取引先側から注文がくると、個人一件一件に電話連絡をしていましたが、売り上げが伸びるにつれその手間たるや膨大なものとなり、連日夜中まで仕事が続くこととなりました。翌日の朝では間に合わない、夜のうちに連絡できていなければならなかったわけです。これでは体が持たないということもあり、何か連絡できる手段はないものかと考えていたところ、役場の防災無線を使ったファックスシステムの認可がおりることから、このシステムを使ってみようということになりました。注文が来たらすぐ伝達し商品をそろえる。まさに町の畑を商品棚としてイメージし「必要なものを」「必要な時に」「必要なだけ」取り出せるというシステムを構築できたことが、取引先にとつて大きな魅力となり売り上げが急増していききました。どんどん

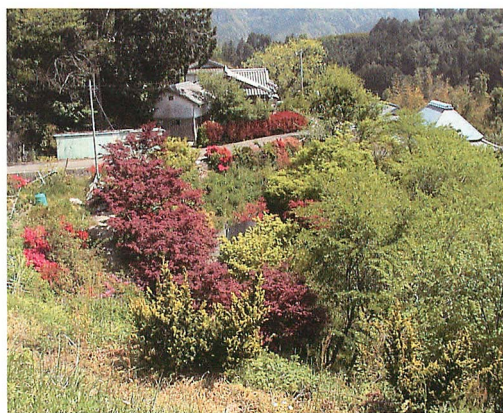


自然の恵みに真心込めて

売り上げが伸びる中、阪神大震災という大災害がありその状況をテレビで見ているとき、コンビニのすごさに「なるほど」と思うことがありました。あれだけ小さな店で、あの機動力、求めているものを供給できるすごさは、まさに上勝の進むべき方向だ、ということを実感し仕組みをしっかりと勉強してみようというんなデータを集めてみました。調べてみるにつれ、そのひとつひとつのことが、この町に必要なということがわかりました。それから高齢者専用パソコンの開発を手がけ、毎日のデータ管理、先読み、人の動き等を的確にとらえて伝える仕組みを構築して行きました。

今までいろんなところに視察につれていたり、講演会を開催したりしてきましたが、結局その場合は「良かったなあ」と意気込むが続くことなく成果はほとんど見られません。これは長い間、公共事業や人にやらされている感覚で仕事に携わっていると「自分で考えて組み立てる」ということができなくなってしまうところからです。ところがこの仕組みを導入したことによって自ら考える習慣ができたことが、驚くべき成果につながりました。情報を自分のものにできる力をつけることができたことは、この事業の何よりの成果だと思います。

情報が人を変えた！



景観豊かな彩(いろどり)の里



お年寄りもパソコンで自ら情報を分析！

上勝の情報機器のもうひとつの活用方法は「気を育てること」です。パソコンによってやる気を高めていくのです。毎日の個人売り上げ、順位の発表、メッセージによってひとりひとりの気が前向きとなっていくように仕組んでいきます。特に毎日の順位発表は隣には負けたくないという競争心が起こり事業の推進力にもなります。パソコンは単なる道具にすぎません。しかしその活用方法によってはすごい力にもなり、上勝のような田舎にこそ必要なものなのです。これからも情報化の波に乗り、益々伸びていくと確信しています。

ITで気を育てる

「はがき」が結ぶ 心のネットワーク

えひめ地域づくり研究会議
代表運営委員 若松 進一

アナログでスローな「はがき」

今考えると笑い話のような話だが十数年前、役場にファックスが始めて設置されたとき、文字が電話回線で送られる不思議と便利さに驚いたものであった。その後の情報社会における技術革新は目ざましく、懐の財布を切り詰めて買ったワープロさえも見向きもされず完全に電子ゴミ化し、パソコン、携帯電話といった情報機器の中で追いまくられるように暮らしており、最近ではむしろアナログ的スローな時代が懐かしく感じられてならない。

IT時代の申し子ともいべき現代の若者にとって、今やインターネットなしではビジネスも成り立たないし、情報コミュニケーションも取れない状態だが、私に限って言えば人と人を結ぶ最高のコミュニケーション手段は「はがき」だと心密かに思っている。

一日三枚の「はがき」書き

十七年前、私は仲間から一冊の小さな本を買った。本といってもはがきサイズの僅か五十ページ程度の「はがきは嬉しい活力素」という講演集である。引き込まれるように一気に読んだが、「一日三枚のはがきを書いたら人生が楽しくなる」というくだりに感心はしたものの、奥書に著者・広島向島郵便局長と書かれているのを見て、切手やはがきを売するための口実かと半信半疑になってしまった。しかしその後広島で開かれた「魅力人間交流マーケット」でその局長と出会ったことからスキルが高まり、その日から一日三枚のはがき書き実践が始まった。

しかし一日三枚のはがき書きは始めてみると簡単単純な実践でも意外と奥が深く、字の汚さを嘆いてみたり、誰に出そうか思案してみたり、はたまたポケットマネーからの切手代の工面などなどに気を配る日々が続き、自己に課したノルマにうんざりの日々が幾度となく襲ってきた。それでも凡人が故の努力をもう十八年間も続けているのだから驚きだ。今では三度の飯と同じように一日三枚のはがき書きはすっかり私のライフワークの一部となっている。

郵便局も驚くほど「はがき」が届く

はがきには官製はがきや絵はがき、自筆の絵手紙など色々あるが、日本一の夕日の町を自認する私の場合はもっぱら夕日夕焼けをあしらったわが町の絵葉書が圧倒的に多い。振り返ってみれば一日三枚×三百六十五日×十八年＝一万九千七百十枚もの夕日の絵はがきが日本全国の知人友人に送られた計算になり、町の知名度を高めるためにいさかなりとも役立っている。もつともそのために枚数×五十円＝九十八万五千五百円の出費がかさんでいるが、コーヒーもタバコも酒も飲まない私にとつて一日百五十円の出費は一杯のコーヒー代だと思えばそんなに高い出費ではない。

出会った人、訪ねたまちへ、心を込めてはがきを出す。時には旅先の駅のベンチで動く机と書いている愛用の気になるカバン（木製）の上ではがきを書いて投函する。なぜなのか私の元へは八歳の子供から九十歳のお年寄りまで、郵便局員も驚くほど多くのはがきが毎日手元に届いている。

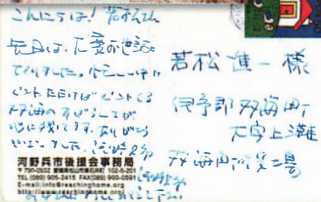
私はその殆どを大切に保管している。いつの日か庭の隅にはがき博物館でも造ろうと思っているが、数あるはがきの中であえて三人のはがきを紹介したい。

一枚目は松山市と合併した旧中島町畑里に住むみかん農家の竹下千鶴子さんからの便りである。婦人会の総会でお会ってから毎月一枚、絵手紙教室に通い日々進化する自筆絵手紙を季節の彩を添えて送り続けてくれている。二枚目は二〇〇一年五月十九日北極で消息を絶ち、その後帰らぬ人となった冒険家河野兵市さんからの便りだ。リーチングホームをテーマに北極から瀬戸町を目指して単独歩行していた河野さんの死は、双海町を通るとき一緒に歩こうと固い約束をしていただけにショックだったが、今は遺品とも思える一枚のはがきをかばんに忍ばせ同行二人の全国行脚を続けている。



中島の
竹下千鶴子さん
からののはがき

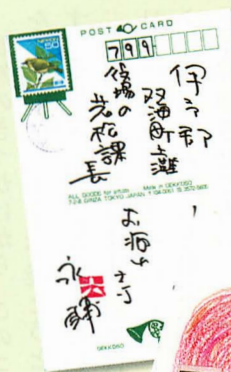
冒険家
河野兵市さん
からののはがき



さて、三枚目はご存知永六輔さんからの便りの一枚である。私たちが主宰した一年四回、十年四十回を目指したフロンティア塾の四十回目講師として永六輔さんを選んだ。しかし永さんはご存知のとおりマルチタレントであり超多忙とあって田舎町の講演などと諦めていたが、夕日の絵葉書のコレクターであることを糸口に夕日のはがき作戦を展開した。「そのうち行く」のはがきのやり取りを何度か繰り返し、二〇〇一年五月二十三日、永六輔さんは双海町にやって来たのだ。その一枚に「夕日はどこかの朝日」とクレヨンで朱書きしたのがあるが、これをヒントにインターネットにライブカメラを接続し、ブラジルの朝日と双海の夕日が同時に見えるアイデアを思いつき全国に大きな反響を呼んだのである。

「はがき」は人間的な 最高のコミュニケーション手段

はがきは、やり取りに時間がかかることから古い情報伝達手段だと思っている人も多い。確かに瞬時に地球の裏側まで届くインターネットのような電子情報と比較すると効果効率の比ではない。しかし人間的な手書き文字のはがきは、機械化された活字の中に暮らしているから余計、手にとった瞬間いかにも人の心を思いやる日本的な文化の香りがするである。まちづくりは人の心を掘り起こすこと。まちづくりはオンリーワンの物語りをつくること。そう考えれば、はがきは人と人を人間的に結ぶ有効な情報伝達手段だと思う。特に若い人やまちづくり人よ、忘れかけていた心の温かさを取り戻しはがき書きに挑戦しよう。



永六輔さん
からののはがき



和歌山生まれの僕は、今治に知り合いも少なかったので、市役所に就職してから、職場の友人の紹介などにより、いろんなイベントに積極的にボランティアで参加するようになりました。そのうち、知り合いも増え、徐々にイベントの魅力を実感するようになりました。

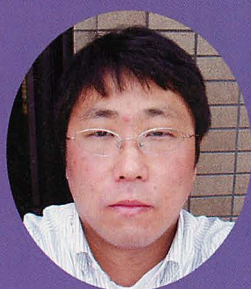
その頃に、よく行くお店でお酒を飲んでいたら、偶然にも横にいた人とまちづくりの話で意気投合しました。そして、酔った勢いもあり、音楽だけでなく漫才や手品など、なんでもありの演芸大会でまちづくりをしようということになりました。その翌日より仲間にも声をかけ、実行委員会を立ち上げました。名前はエンドレスサマーコンサート実行委員会、委員長は吉武さんという理学療法士の先生です。毎月一回、知り合いの中華料理店で委員が二十名程度集まり、定例会として打ち合わせもかねた飲み会を開催していました。一人あたり二千五百円円集金し、そのうち千円を会費として当て、それを運営費にあてていました。この会には当面の目標として、二年後のしまなみ海道開通に向けて、元気な今治を全国に発信ができればという目標もありました。

今治市の広報や自分たちでつくったチラシを配るなどして出演者の公募を行い、知り合いの楽器店からの紹介や、委員の知人の紹介などいろんなネットワーク

クを使い、出演者を集めました。会場の使用許可や、周辺の自治会長さんなどにもご説明に行きました。備品なども予算がないので、知人から無理を言ってレンタルなども借りました。このコンサートの趣旨を十分理解してもらうため、出演者の代表者にも打ち合わせに参加してもらいました。

ようやく一九九六年七月二十日第一回目となるコンサートにこぎつけました。海や港から情報発信をしたかったので、会場は今治港のふれあいマリナ広場で開催しました。僕も「ピョートルズ」という市職員で組んだバンドのギターで出演

イベントを通じて学んだもの



今治市

イベント推進課
畑 紀輔

しました。そして無事に記念すべき一回目が終了しました。

終わってから思ったのは、たった一つの、それもちいさなこの市民のイベントをつくるのに本当に多くの方々の協力により運営されているということでした。

偶然のきっかけから、このコンサートを立ち上げて十年が経とうとしています。そして、出演していたいた方々は二百組近くになります。結果はまだ目に見えて現れていません。しかし、本当にすばらしい人たちと出会い、いろんなことを経験させてもらいました。イベントは実施することが大切ではなく、目的に向かって運営していく過程が大切です。それが、本当の意味で人づくり、まちづくりであると僕は思っています。



エンドレスサマーコンサート

<http://www.dokidoki.ne.jp/home2/yosiyosi/>



大学生ボランティア講座

<http://v-l.candypop.jp/>

『その時』までどちらかというと、脚光を浴びることが少なかった『ボランティア活動』は、まちづくりを推進していく上で、今、最も大きく必要な原動力ではないでしょうか。

近年、度重なる自然災害が地球上のいたるところで起こっていることは周知の事実であり、この日本においても記憶に残る「阪神淡路大震災」の中、政府等行政機関の対応だけではどうすることもできない状況でありました。『その時』活躍したのが特別知識や技術のない若者をはじめとしたボランティアによる救護活動の皆様方でありました。

今、私は業務の中で「市民」や「企業」、「大学」との協働によるまちづくりという非常に大きなテーマをいただいているのですが、何とか松山市のまちづくりを推進していく上で役に立たないかということで、特に『大学生との協働』ということに着目しています。

『まちづくりは愛するということ』から始まる

松山市

市民参画まちづくり課
山本 早千奈



地元の大学にご協力いただき、また、大学生と直接ふれあいが、できる限り密接な関係を築くことに心がけ、やつとボランティア活動に興味のある学生を呼び寄せる『大学生ボランティア講座』の開催にこぎつけました。昨年、十月から約半年間に「全体会」「分科会」「合宿」等の交流会を開催し、ようやく学生のボランティアネットワークの種をまいたところでありますが、今年度は、それを芽にし、苗にする年だと感じています。

また、「まち」の構成員である大学生が、「まち」に対する活動を実践している、そして、それを知った市民に「多様

な人々の参加によって誇りあるまちを築いているんだ」ということを認識していただき、大学生は限られた期間のみ松山にいる人ではなく、松山を愛し、自分達にここであることを実践している層だと感じていただけるようになれば良いなと思っています。いずれにしても、大学生というこれまで行政と関わる機会の比較的小なかった『未知数のパワー』を最大限に活用して、愛すべき『ふるさと松山』のまちづくりを市民や企業・大学と協働しながら推進していくことができれば、私にとってもこの上ない喜びであるという風に感じながら、『松山を愛しきる』ということを念頭に業務に取り組んでいくことをここに誓いたいと思います。

最後に、昨年、共に汗を流し、市民活動の普及啓発に全力を注いであげた大学生の言葉をご紹介して、私のメッセージを終わりにします。

『ボランティアって何だろう？月並みな言葉ですが、お金以上に得るものはあります。でも「お金以上」って何？。大学生にとって、若者にとって「お金以上に価値のあるもの」それは人との出会い、経験値だと僕は感じています。失敗・成功・迷い・喜び、色々なことを体験していく中で人間は成長していくもの。そして、誰にも奪われることのない見えない財産は、これから自分が出会う経験に生かされていきます。』

ひめ
* 媛のかわら版 *

お伊ネさんドイツへ行く！



みかん一座

座長 戒田 節子

VOL.3

<http://www.mikan-ichiza.com/>

● 現地のスタッフと舞台製作

十月十四日、六人のスタッフが先にドイツ入り。メンバーが来るまでに整えておかななくてはならない多くの事がありました。日本から送っていた設計図を元に現地の大工さんが大道具の枠組みを製作。それを組み立て色を塗っていきました。小道具もいくつか現地で作りしました。ドイツの会館スタッフの協力であれよあれよという間に仕上がりつつあったのです。一方、舞台に出演してくれるシーボルト・ギムナジウムのダンス部の練習に立ち会った私は、ドイツの少年・少女達に日本で作ってきた衣裳を着せ、振り付けの確認などをしました。彼らは、早く日本の子供達と会いたいと瞳を輝かせていました。

● 緊張の中でのリハーサル

ビュルツブルク市は、人口約十三万人。世界遺産である宮殿をはじめ、歴史と文化の薫る本場に美しい町です。中心街を歩くと、「シーボルトの娘・イネ」のポスターがそこに貼られてありました。私は、シーボルトの像を訪ね、公演の成功を願いました。

メンバー全員が会場入りしたのは、公演前日。その日、ステージには日本間が



出演した日本・ドイツの子ども達の交流



ドイツで再現された日本間で公演

作られ、れんげ畑や軍艦などが出来上がり、驚きの歓声があがりました。心配していた音響・照明の作業は日本のチーフを中心に、ドイツスタッフとの素晴らしいチームワークで進めることができました。言葉は、通訳を介してですが、いっしょにお互い目と目で会話ができるようになっていました。子供達は・・・というところ、楽屋を一緒にしたこともあり、すぐに仲良くなりました。大きな輪を作り、みかん一座の子供達はたどたどしいながらも、覚えたドイツ語で一人ひとり自己紹介をし、作って来た日本とドイツの国旗や折鶴などをプレゼントすると、ドイツの子供達は焼いてきたクッキーをプレゼントしてくれました。スタッフとして同行したお母さん達は、この様子を側で見ながら大きな拍手を送っていました。長

鳴りやまないカーテンコール



れど、芝居は日本語です。ドイツの皆さんにわかってもらえるだろうか？そんな心配も吹っ飛ばように会場からは、笑い声が聞え、

二〇〇四年十月十六日(土)とうとうその時がやって来ました。「この日のために頑張ってきたんよ。応援して下さい。多くの皆さんに感謝して、精一杯の舞台をつとめさせていたくださいね。」みんな手を重ねて勇気づけ合いました。午後四時、マインフランケン劇場七百席は満員。客席には多くのドイツ人、ドイツ在住の日本人、そして三好西予市長を団長に約三十人の故郷からの応援団の姿もありました。いよいよ幕が上がりました。ドイツ語のナレーションは所々に入るけれど、芝居は日本語です。

●鳴りやまない拍手

旅で疲れ、時差ぼけもあろうかと心配していましたが、ドイツへ来た興奮と本番への緊張で、みんな頬を紅潮させリハールを行い、明日へと準備を進めて行きました。



シーボルトの子孫
コンスタンチン・ブ
ランデンシュタイン
ツェベリンご夫妻
と記念撮影

すすり泣く声も聞こえてきました。シーン毎に拍手が起こりました。言葉はわからなくても、心が伝わっている！それを感じた私達は硬くなっていた体がほぐれていき、いつしかのびのびと演技をしていました。フィナーレでは、日独の出演者全員が手をつなぎ

♪ありがとう ダンケシェーン……♪

と、一番を日本語で二番をドイツ語で歌いました。舞台の袖では、裏方スタッフたちが肩を組み歌っていました。鳴り止まない拍手。何度も何度もカーテンコールが繰り返され、私達は感動で心がいっぱいになり、止めどなく流れる涙をどうすることもできませんでした。

公演後、シーボルト協会主催の歓迎パーティーがあり、出席して下さったビュルツブルク市長から感謝の言葉をいただきました。この公演を市をあげてどんなに心待ちにして下さっていたかを知りました。ドイツのテレビ、ラジオ、新聞各社のマスコミは、みかん一座の公演

を大きく取り上げ、成功を報じてくれました。

●架かった友情の虹

嵐のように過ぎた数日間。日本とドイツに架かった友情の虹。あの時をきっかけに文通を始めた高校生もいます。未来を担う子供達が国境を越え、手をつなぎ、心をつなぎ、平和な世界に向かっていく小さな種になれば・・・と願っています。私達の心に一生消えない思い出が刻まれました。ドイツへ送り出して下さった、本当に多くの故郷の皆さんへの感謝の気持ちも、この思い出と共に忘れる事はできません。ありがとうございました。

今年八月、二十二年目に突入するみかん一座。「故郷を元気に！」の活動を、これからもコツコツと続けてまいります。どこかで見かけたら、どうぞ声をかけてくださいね！



ドイツ公演のパンフレット

“MY TOWN” うおっちゃんぐ

歩キ目デス&足ラテス

第32弾

情報を生んだ小さき建物

「古学堂」・大洲市阿蔵



まちなみ探偵団
岡崎直司

今号は、情報というテーマで県内ウォッチングを試みることとなった。通信手段としては郵便と電信・電話があるが、面白いことに、江戸期に日本初の通信実験をした傑物と、その建物が愛媛に存在している。ここから話を始めよう。

その名は三瀬周三（後に諸淵^{もろぶち}）、城下町大洲の商家に生まれ、少年期から頭脳明晰^{とくわ}、神童と呼ばれた彼は、八幡神社常盤井家の私塾である古学堂に学ぶ。ところが、彼の身内にはもつと大変な人物が居た。かのシーボルト門下で師に最も信頼され、後に師の忘れ形見おイネを養育する二宮敬作、その甥が彼だった。十五歳でその叔父に入門した彼は、勉学に励みつつ宇和島、長崎へと遊学する一方で、十九歳の時どうやら電信の知識を長崎か

ら持ち帰る。実験は、今に現存する古学堂から肱川上流の河原に一キロメートル近くの銅線を引き、そして打電、成功！。かすかな音だったらしいが、当時のお城下では「針金だより」として大変な話題になったと伝わる。時に一八五八（安政五年）、安政の大獄の前年、如何に画期的な時代の先がけであつたかが分かる。そんな人物であるから、通訳としても超一流、数ヶ国語を操り語学の天才と伝わる。再来日し幕府の外交顧問となったシーボルトの最後の弟子として、江戸出府の際は、二十歳そこそこで通訳として各国との交渉をこなした程である。が、好事魔多し、あらぬ嫌疑をかけられ、入獄の憂き目に遭うこととなる。何とかイネや宇和島藩主伊達宗城^{むねなり}の釈放嘆願により許されたが、それは四年の長きに及んだ。

やがて、後にイネの娘、つまりはシーボルトの孫娘になる高子と結婚し、将来を嘱望されたが、惜しくも三十八歳の若さで病死する。惜しい人物であつた。

大洲八幡神社の麓にある古学堂の近くには、「日本における電信の黎明」という石碑が、昭和五十六年日本電信電話公社（現NTT）によって建てられている。想えば、この小さな建物から、当時はまだ全く無名の一人の若者が、日本初の行為

に及ぶ訳で、そのチャレンジフルな高揚した気分が何とも不思議な、現在の静かな佇まいである。恐らく、当時の古学堂は国学や蘭学^{らんがく}を学ぶ情報拠点として、俊英^{しゅん}たちがあひ集い、侃々諤々^{かんかんかくかく}の議論が行なわれていたに違いない。

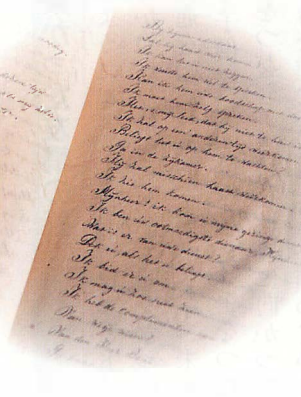
事実、この小さな学び舎からは、王政復古運動に功のあった国学者矢野玄道、五稜郭を設計した武田成章、岩倉具視の懐刀と云われた香渡晋^{かうど}、書家の三輪田米山^{みづの}などなど、キラ星の如き多士済々が輩出している。

情報とは、一説に「情けに報いる」とこと、とも言われるが、このような熱き情の溜まり場こそが、真の情報発信基地なのかも知れない。諸淵の実験は、時ところを得た行為だったのである。

※参考図書①古学堂については、大伏武彦著「民家と人間の物語」愛媛新聞社発行の第八章に詳しい。

※参考図書②「大洲・肱川の畔にて」常盤井忠香著（アトラス出版）

三瀬緒直筆の文字





③ 時を経て何事かを今に伝える出格子。

① 古学堂全景
寛延三年（一七五〇年）築の文庫（右手前）と後に増築付加された学室（平屋）。



④ 襖（ふすま）の漢詩が当時の古学堂のありようを偲ばせる。曰く、武田斐三郎による五稜郭築城の事や閉門の憂き目にあったことなど……。

② 縁側より学室を見る。



※ 昨年の台風災害では、古学堂が床上浸水し、この襖（ふすま）の三分の一まで水位が及んだ。
文化財保存の対策が急務である。



この狭く小さな八畳の間で、国学・蘭学等の講義が行われ、有為の志士たちが全国へと羽ばたいていった。多くの塾生が部屋に入りきらず、何人かが石垣に割り木を差し足掛かりとして、左の出格子にすがって聴講したと伝わる。
「翠屏書屋」は香波晋（こうどすすむ）の書。

●媛のくにフラッシュ●

『昭和レトロ満腹思ひ出倉庫』

—横丁入れば昭和…懐かしさやぬくもりの空間にタイムスリップ—



レトロ満載の横丁を再現

懐かしい
昭和30年代の生活空間



えひめ町並博で漫画家の松本零士^{れいじ}さんの特別展などでにぎわったコアイベント会場「思ひ出倉庫」が、昭和レトロを楽しめる展示室としてリニューアル。場所は「おおず赤煉瓦館」横で、製糸工場の蔵として建てられたものを平成15年度に大洲市が展示室として改修したもの。会場には、薬屋や交番、理髪店、駄菓子屋が連なる懐かしい横丁を再現。駄菓子屋の店先を入ると六畳間や台所、トイレなど昭和30年代の生活を体感できる。古い家具やちゃぶ台には生活感が漂い、お祖父ちゃんやお婆ちゃんの会話や子供達のはずむ声が、今にも聞こえてくるような不思議な空間である。

《開館時間》9:30～16:30(入館は16:00)

《休館日》毎週木曜日

《問い合わせ》大洲市商工観光課 TEL 0893-24-2111



●『ネットデイで学校革命!』

鈴木敏恵 編著 学事出版株式会社 2000円(税込)

黒板と教科書という百年続いたメディアから、新鮮で美しいコンピュータによるプレゼンテーション授業をワクワクとスタートさせている先生たち。学校革命は「教室」から始まっている。米国生まれのネットデイだが、自分たちの地域の学校は自分たちでLANしようという「日本版ネットデイ」が、日本全国で始まっている。ネットデイは、そこに生じる様々な人との結びつき、学校の運営や新しい教育への支援、ボランティア経済への可能性など、次世代社会を考えるに不可欠な示唆に富んでいる。

教室に起こったさわやかな風を感じてみたいだろうか・・・。



助成団体決定！

『平成 17 年度 まちづくり活動アシスト事業』

地域活性化を目的とした活動に幅広く助成する当事業ですが、今年も県内 19 団体（東予 4、中予 7、南予 8）から申請をいただきました。

審査の結果、次の 5 団体に助成が決まりましたのでお知らせいたします。

○西予市 『狩江地域づくりサロン』 ワークショップ開催

狩江地域づくりサロン実行委員会（代表 兵頭 岩雄）

○砥部町 『陶街道 53 人委員会の設置と開催』 学習会

NPO 法人 とべ・TOBE（代表 矢野 徹志）

○大洲市 『人面広場整備事業』 公園整備事業

豊友会（代表 稲田 光一）

○松山市 『コミュニティレストラン実験事業』 福祉関連事業

縁側プロジェクト（代表 稲津 智）

○津島町 『岩松のあおぞらアート』 イベント開催

岩松絵縁会（代表 越智 健二）

各事業に関心がある方はセンターまでお問い合わせください。（担当：兵頭）

BOOK INFORMATION



●『宮本常一 旅する民俗学者』

佐野眞一責任編集 河出書房新社 1500 円（税別）

今、宮本常一が静かなブームを呼んでいる。宮本常一は民俗学者として紹介されているが、離島振興に奔走した辺境のリーダーであり、各地のすぐれた農業、林業、漁業の技術を精査し、全国に伝播指導して歩いた経世済民のオルガナイザーでもあり、地域芸能の発掘と育成を通して地域の活性化を図ったプロデューサーだった。来年 2006 年は生誕百年目にあたる。「自然は厳しい。しかし人の手が加わると暖くなる。そんな暖かなものを求めて歩いてみよう。」

そんな声が聞こえてくるような一冊である。

お 知 ら せ (財団法人愛媛県市町振興協会)

『サマージャンボ宝くじの賞金は、1等・前後賞合わせて3億円』

1等 2億円×42本 前後賞各5,000万円 2等 1億円×42本

この夏にかけろ。

1等・前後賞合わせて
サマージャンボ3億円

2005年市町村振興宝くじ
7/15(金)発売
発売期間: 7/15(金)~8/2(火)
抽せん日: 8/12(金)

1等2億円 1等前後賞各5千万円 2等1億円
この宝くじの収益金は市町村の明るく住みよい街づくりに使われます。

印刷/岡田印刷株式会社

(財)えひめ地域政策
研究センター

発行/平成十七年七月一日

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

TEL 089(932) 7750

☆ <http://www.ecpr.or.jp>

☆ E-mail: info@ecpr.or.jp

本誌は、(財)愛媛県市町振興協会の委託を受けて発行しています。